

「サブライム」

山口優（画・小珠泰之介）

「お望みの品はこれでよいでしょうか？」

そのハイパーコープのエージェントは、そう私に問うた。

「……間違いないようね……ご苦労さま」

私はそう答える。私の返事を聞いて、エージェントは、するりと、その存在感を、私のメッシュ上の空間から消した。

「ついに手に入れたわ……あなたを」

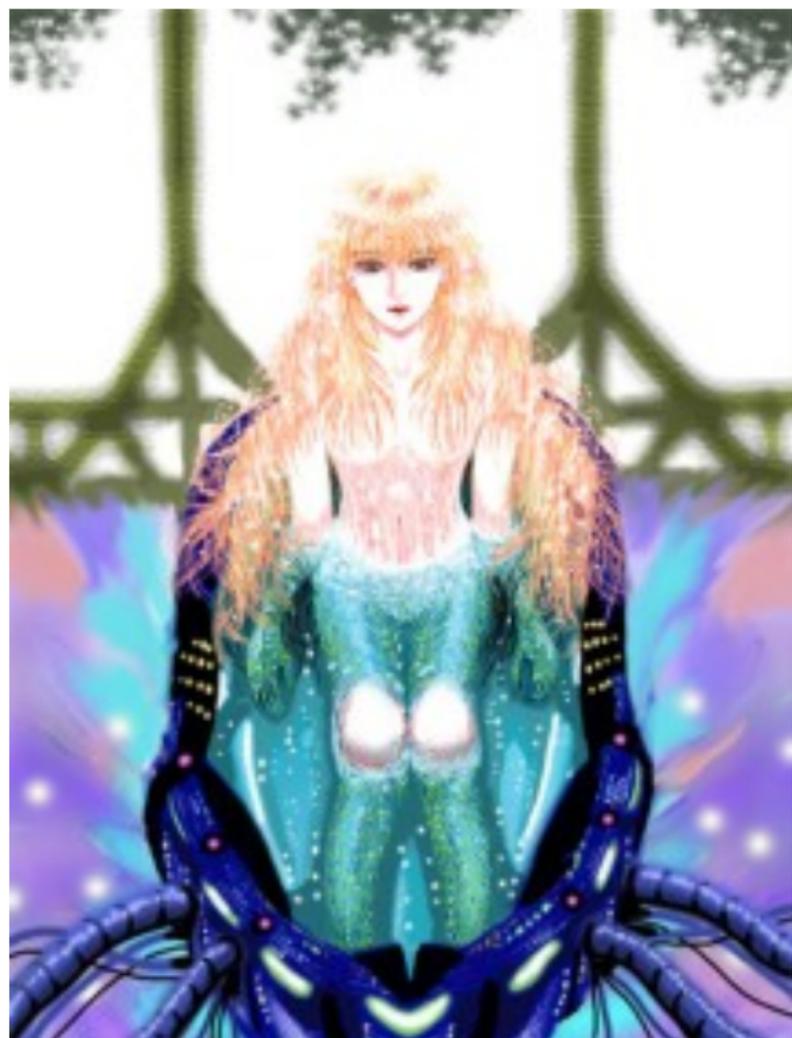
私はこみ上げる笑みを抑えることができないまま、手に入れた肉体を眺めた。

煌めくようなストロベリーブロンドの長い髪。艶やかな白皙の肌は二〇代前半のものだ。均整の取れた、それでいて蠱惑的な体つき。その魅惑的な肢体を、余すところなく私の視線に晒している。

エステル・レンピカ。

Before Fall

大破壊前20年〜10頃に活躍した総合芸術家である。中でも著名なのはダンサーとして  
の彼女だ。



大破壊を生き延びたが、大破壊後5年頃に自殺した、と伝えられている。——情報があやふやなのは当然で、レンピカは自殺と同時に、自らに関わる情報を可能な限り消去し尽くすよう手配したのだ。それは、レンピカ自身の遺伝子情報、コピーし得る精神情報などを含む。

つまり、彼女は、完全なる自殺を目論んだ、と言える。もう二度と誰も彼女を再生できないように。再び、彼女がこの世に目覚める可能性のないように。

だとすれば、私は彼女の遺志に真つ向から反していることをしていることになるが……まあ死者に意志はない。諦めて貰おう。

私は、仮想空間内の私の部屋の中で、ひっそりとほくそ笑んだ。

私自身は『心の部屋』と呼んでいる、このメッシュ内の仮想空間は、生物学者としての私が、自分の思索を自由に拡張られるよう、私の肉体、木製の椅子と机、ふかふかのベッド、そして屋外から差し込む日差し、たゆたう大気まで、第二量子化レベルで模擬されている。本来なら、せめてプランクレベルまで模擬したかった。だが、それにはメッシュの資源が足りない。

まあ、よしとしよう。これだけの揺らぎがあれば、私は、私の自由意志をそこそこに感じていられる。何しろ、差し込む日差しもたゆたう大気も、かつての地球の気候デー

タを元にランダムに変動させているのだから。

本来なら、これでもまだ、完全ではない——。

完全な意志、即ち完全な揺らぎに至るには、私の肉体と周辺環境全てを完全現象論レベルで模擬する必要がある——つまり、全てを構成する量子をその量子そのもので再現することであり、それは肉体の再現に他ならない。そうでなければ、いくら私を取り囲む模擬の系がメッシュ内で大きく広がっていたとしても、それら全てを包含した、ただの不完全なプログラムだ。世界内存在として在るしかない私の地平は、所詮その程度の広がりには留まる、ということだ。

ときどき、インフォモーフを纏っていると自称する、自分に意志があると誤解している憐れなプログラムたちを、私は憐憫の情を以て眺めている。だがその憐憫は、容易に自分に跳ね返ってくる尺度だ。

私も、まだ完全ではない。

だからこそ私は肉体を求めた。そしてそれは、肉体を持つに足る甲斐あるものでなければならず、私の不完全な記憶データから再構成した、この仮想空間上の肉体ではあり得ない。

『パンドラ・ゲート』がらみの怪しげな冒険者がもたらしたデータ。そこからサルベ-

ジしたレンピカの肉体データから、バイオ系のハイパーコープ——スキンセティック——に作らせた、レンピカの肉体。

私にとってそれは、受肉するに足る、選り抜かれた実存だった。

私は仮想空間上に表示されたレンピカの肉体に重なるように、身を横たえていく。同時に、ハイパーコープの培養槽に浮かんでいるレンピカの肉体を覆う濃密なメッシュの通信波、そしてその肉体の神経系に仕掛けられた多量の通信系ナノマシンを通じて、私はレンピカの肉体と一体化していく。

そして、私は目を開く。

不思議な感じだ。

とても、不思議な……。

記憶は、あのメッシュの中にもいた私のままなのに、私の心の奥底からわき上がる感情は、メッシュに居たときは、全く異なっている。

つまり、嬉しくない。

この清々しい肉体を動かすことに、殆ど喜びを感じていない。

これは、どうしたことだろう？

私は、ざぶりと、培養槽から身を起こした。げほ、と一つ咳き込み、口腔内の培養液

をはき出す。肺に入っていた分は、そのまま吸収され、大気が私の中に充たされていく。そして、私はそつと両腕で身を抱きながら、近づいてきたスキンセティックのエージエント（オクトモーフだった）に視線を向ける。

「どうですか、新しい身体は」

エージェントの問いに、私は首を振った。

「そうね……前髪が気になるかな……ハサミ、ある？」

一瞬、オクトモーフは戸惑ったような仕草をしたが、やがて、脚の一本で、手術用のハサミを差し出してきた。

「これで用は足りませんか？」

「うん、ありがとう」

私の手は、狙い定め、私の頸動脈にそれを突き立てた。

ずぶり。

私は、自分が自分の意志を貫き通すのを、傍観者のように眺めていた。

何が何だか分からない、という意識と、これでいいのだ、という感情とともに。

薄れていく意識の中、私は崇高な何かを感じていた。

ダンサーが意識を無にし、自らの肉体が踊るに任せる時に感じるような、とても崇高

な何かを。



Eclipse Phase は、Posthuman Studios LLC の登録商標です。本作品はクリエイティブ・コモンズ『表示 - 非営利 - 継承 3.0 Unported』ライセンスのもとに作成されています。ライセンスの詳細については、以下をご覧ください。

<http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/3.0/>